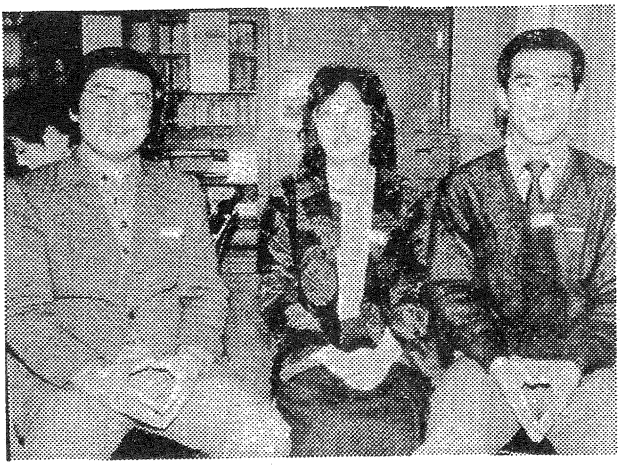
なぜ英語が話せないの？

<14>

話せる先生へ脱皮

断続研修 驚くばかりの熱心さ

「断続研修」の効果は大きい、と語る左から真崎、中垣、宮井先生



「英会話のできる英語教師の養成」を目指した県教委の「断続研修」は、毎週金曜日に県教育センター（粕屋郡篠栗町）で開かれる。ここで現在、筑後、福岡、北九州、筑豊地区から集まった中、高校の英語教師二十人が一年間（実質三十五日間）に及ぶ"特訓"を受けている。

「年齢は、二十歳代から四十歳代まで。先生たちの受講目的も"成果を教育現場で生かしたい"や"英語教師として十分な英会話力を身につけたい"など、さまざま。共通点は驚くばかりの熱心さです」と、新原・同センター研究主事は話す。

中垣貴和子・小郡中教諭(三十三)の場合は「生徒に教えるだけの英会話力がなかった」のが受講の理由だった。「何を今さら」とも考えたが「教師として怠慢は許されない」と思い直し、申し込んだ。それから英語指導主事助手のスティーブ・ロングさん(三十)＝米国コネチカット州出身＝や他の先生の前で、冷や汗をかきながら英会話をやらされる毎日。二分間のスピーチが続けられず、悩んだことも一度や二度ではない。

「でも、意味が十分理解できないヒアリング実習や会話、文例暗記をこなすうち、少しずつ自信がつき、教室では、不足気味の会話をできるだけ補うよう努力していきます」

教育センターの下垣内辰雄研究主事は、こうした先生たちの悪戦苦闘ぶりを「貴重な体験」と評している。自らを"苦境"に追い込まなくても、受験英語を教えるにはコト欠かない先生たちが、会話をこなそうと必死に学習する。厳しい集中講義の中から、こつこつ実力を向上させる。"貴重な体験"をする先生たちの姿には、英語教師としての責任感や義務意識の強さがにじみ出ている。

ロング先生は「中垣先生はじめ、受講者の英語は大変うまい」と言う。英検でいえば、一級クラスの教諭もおり、平均では一級と二級の中間レベルの教諭が多い。日常会話はもちろん、相当まとまった内容が話せる水準である。

ただ、問題は「断続研修」の受講希望者は、大半が英会話にある程度、自信のある先生に限られること。会話が苦手の先生たちは敬遠しがちで、中には「英語教育と英会話は別」と言ってはばからない教師もいる。

十年前、断続研修が始まって以来、受講者は県下で二百二十人にのぼったが、英語教師全体からすれば一三%余に過ぎない。

「中、高校英語教師の八割は厳密に言えば英語が話せない」（福田昇八・熊本大学教授）と指摘される実情のなか、教師の質の向上を求める声は強い。真崎良幸・久留米大学付設高校教諭(三十)や宮井聡・三池高校教諭(三十)は「各先生が自分の欠点を克服しなければ、問題は解決しないだろう」と話している。